

第三十一回 川柳マガジン東京句会

平成二十一年一月

自由吟鑑賞・短評

松橋帆波

いい歳を重ねていると言われたい
「いい歳の取り方」という共有性の高い概念
の処理が上手いと思う。

多事多難缶コーヒーは温かい
四字熟語を句に使う是非。好みの問題だろ
うが、動いてしまう可能性も。

十二支がひと回りして減る賀状
下五から感慨の深さを感じる。
上五の表現がまともでは？例「子から亥へ」

屠蘇祝う口をへの字に腕もくむ
上と下の差の大きさが面白さを生んでいる
が、例えば
「新年のニュースに腕を組まされる」
のように原因と結果が多少類推できるほう
がいいのでは。

するされる介護で幸を分ち合い
私見だが、「分かち合う」と締めた方が、「幸」
に温かみが出るように思う。

母の瞳へこの先の嘘言いそびれ
心の動きへの捉え方が素晴らしい。

後期ほど増すプライドを読み違え
後期高齢者を題材にした作品は多数あった
が、「後期ほど増すプライド」という表現で
高齢者に対するアイロニーも少し感じさせ
る。

地球思い作る会社の派遣切り
上五が窮屈。

「地球環境を思いやるくせに・・・」という

キモの部分が伝わりにくくなっている。
思い切って「労働環境は寒冷化」のような表
現を試してはどうだろう。

例えば「地球温暖化日比谷は寒冷化」

街捨てる里に帰って地を起す
上五「街捨てる」という表現の勢いと「街を
捨て」という切れを比較してみたい。

寄せ鍋をキムチ一存朱に染め
キムチ「の」一存で、という意味だろうか。
助詞についての検証してみたい。
例「どんな具もキムチはキムチ鍋にする」
「は↓が」など。

ど忘れをしてアドリブで切り抜ける
切り抜けた状況が読み手によって広がる。
もし、上五が別の表現なら、どう広がるのか
比較してみたい。

焼餅を膨らめている好きな人
中七をもう少し推敲したい。
句意から外れてしまうが「焼かせてみたい」
「膨らませてる」「焼いてくれない」など、
通常伝わりやすい表現を探してみたい。

警察は独り者だと知っている
このアイロニーは凄いと思う。

釣れた人だけが明るい帰り船
表現が大人しいのでは。
例「釣れた奴だけがうるさい帰り舟」

背が伸びた蛇はそろそろ脱皮する
「なるほど蛇は太るのではなく長くなるも
の・・・」と感心させると同時に、「背が伸び
た蛇」という言葉が何かを暗示している印象
を抱かせる。

「背伸びした蛇」という言葉と比較してみ
たい。

白くなる術を忘れた冬の息

「白くなる術」という表現で「その術を忘れたのは自分自身である」という喩を感じる。解釈が広がっていく作品だと思う。「吐く息も白くならない温暖化」という見立てでは勿体無い。

人間が好きで早死になど出来ぬ

「憎まれっ子世に憚る」という言葉と繋がると、非常に面白い作品である。素直に読んでも佳句だが、視点を逆さまにした時に味わいが出てくる。

あいまいに別れた人の年賀状

この「あいまい」と感じているのは自身。では相手はどうだろう。そこから想像が広がっていく佳句だと思う。

念仏を唱え始める乱気流

表現がストレートすぎる印象。

例えば「念仏も飛び飛び乱気流の中」

お茶飲みに孫の土産を惜しく出し

中七以降の表現が憎い。上手いと思う。

身の丈の暮らしに慣れて恙無い

作品世界の広がり考えた時「恙無い」という下五は、勿体無い印象を抱かせる。意外なだけけれど「はっ!」とする五音を読み手は味わいたいもの。

例えば「身の丈の暮らしに慣れた」

雨の音にたまの朝寝を破られる

上五「雨の音」とし切れを置いてもいいのではないか。もしくは「せつかくの朝寝へ憎い雨の音」のように語順を変化されるなど。

派遣村千代田の森に小舟出す

事象の表現方法として、言い換えただけの言葉になっていないか、という推敲が必要。「小船」というアイロニーが効いているだけに少

し惜しい。

オレだけど詐欺に遭うなど電話来る

着想としてはよく見る形。下五を「来る電話」「電話する」「電話口」などと比較し、電話の主を浮かび上がられる工夫を、上五、中七で匂わせられれば、月並みではなくなると思う。